

私 の 工 夫

支える生徒指導

「生徒指導提要の改定を受けて」

倉敷市立赤崎小学校

教諭 吉清 久師



1 はじめに「生徒指導」に対する意識改革

生徒指導の基本書である生徒指導提要が令和4年12月に改訂された。本校でも生徒指導上の諸問題をかかえる中、生徒指導の考え方や指導方法を見つめ直し、より子どもたちが主体的に成長できるような「支える」生徒指導ができるようにしていくことが急務である。そこで、教職員の生徒指導に対する意識改革をするため、市教委の先生を招いての研修や終礼、職員会議などでのミニ研修を定期的に行った。主に効果的な発達指示的生徒指導と生徒指導の「4つの視点」を取り入れた授業や生活指導ができるよう職員で足並みを揃えて指導ができる体制を整えた。

2 全校での取組

全校児童を対象に、発達指示的生徒指導の充実を図った。

例えば、今まで教師主導で決めていた校則について高学年を中心に意見を募り、見直しを行った。それまで筆記用具は鉛筆と決めていたものを4年生以上はシャープペンシルも可とした。

ただし漢字の書き取り練習や硬筆など清書を求められる場面では鉛筆を使うようにするなど、教師側と児童側で合意形成を図って校則を決めたことで規範意識の高まりを感じた。

ほかにも、廊下歩



全校児童の願いをこめた折り鶴

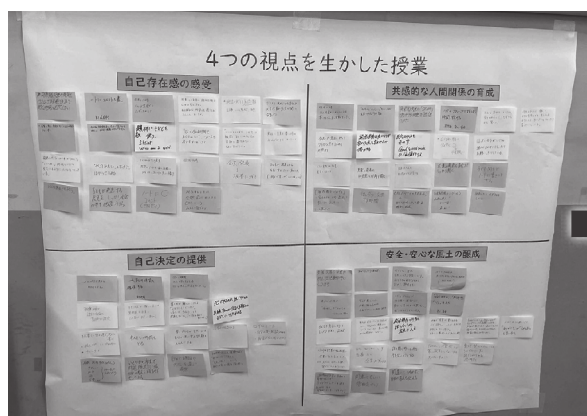
行の取組にも工夫を加えた。「歩こう」といった声掛け指導中心ではなく、全校児童で作った「折り鶴」を廊下の中央に並べ、「みんなの鶴を大切にするためにはどうする？」と投げかけた。各クラスで話し合うことで、児童主体で「廊下を歩こう」という意識に変わり、お互いに廊下歩行を呼びかけ合う姿が見られるようになり、起因するケガやトラブルも減少した。児童の姿を見取り、その姿を教師が全校放送で称揚（しょうよう）することで望ましい姿が価値付けられ、廊下歩行以外の「あいさつ運動」や「くつそろえ」などでも学校をよりよくしようという児童の動きが見られるようになった。

3 各学級での取組

どの場面でも、教師が「させる」のではなく、児童自身が成長しようとする力を引き出し、「支える」指導への転換を狙った。その結果、全校アンケートの「自分にはよいところがある」の項目で「当てはまる（やや当てはまるも含む）」は前年度の72・4％から81・3％へと大きく向上し、県学力・学習状況調査でも同項目がR5年68・1％↓R6年75・0％↓R7年84・3％と向上し続けており、自己肯定感の高まりにも効果を感じている。

生徒指導は生活場面だけではなく、学習場面でも大きく関連することから、授業の中でも生徒指導提要の「4つの視点」を全学級で取り入れた。研修を通してアイデアを出し合い、本校職員の工夫を次の表にまとめた。職員室でもお互いの工夫を掲示し、参考にしながら授業改善を行っている。

以前に見られた数人で教室を抜け出す「授業エスケープ」は無くなり、不登校児童も少しずつ減少



職員室に掲示し、工夫を共有

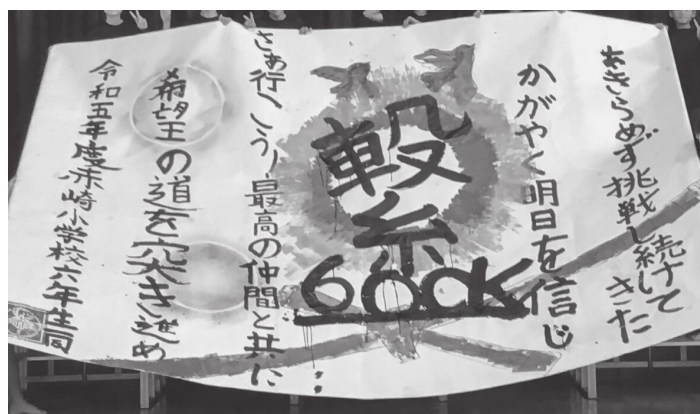
4つの視点を生かした授業	
自己存在感の感受 ・発表したらどんな意見でもはめる。最後まで聞く。 ・発表や意見は顔、表情を見て聞く(うなづく、拍手) ・一人一人の考えを大切にします。 ・ノートや作品にコメントを入れます。 ・添や自主学習で作った作品などは掲示してみんなに披露。 ・サイズカードを積極的に使う。 ・いい場面を見つけたら、すぐはめる。 ・授業ではネームプレートを使用して個人の意見を示す。 ・顔を見ては全員の見え方を聞く。(パノノールを活用) ・質問に答える。返答を待たず。 ・やりたいと言ったことは可能な限りさせてみる。	共感的な人間関係の育成 ・「わかる」「いいよ」「すごい」などの反応がでる学習者に。 ・お互いにいいところを褒め合う。→ 全員からもらえるようにしたい。 ・ペアやグループで話し合う時間を積極的に設ける。 ・授業後、他の手におもてようを言わせる。 ・笑顔(目で話聞く、うなづく)の姿勢。 ・聞いている子がいいたらみんなで助け合うクラスに。 ・授業後などにエゴグラム、グループワークや話し合い。 → 友達とつながる。遊ぶ、楽しむ! ・子ども同士でノートにコメントなどを書き込む。 ・道徳の授業で使う。 ・道徳授業の充実。
自己決定の提供 ・自分で課題や学習方法、道具を選ばせる。 ・「自分からやる」「〇〇派」のような自己決定の場。 ・授業も自分たちでやる。 ・一人一人の時間を確保する。 ・自己決定が難しいときは選択肢を出す。 ・授業の中で、様々な選択肢を積極的に設定する。 ・国語の授業で、好きな作品の字を覚えていく。 ・水泳が苦手な子には、大プールや小プールを選択して学習。	安全・安心な風土の醸成 ・間違ってもいいような雰囲気。何でかきいえる雰囲気づくり。 ・発表やら分からなくたって進んでいい。OK! 褒められる。 ・なかよし学校の字も出る。進、いつかーなど出すを記入する。 ・なかよし学校や学習の様子など、常に教室にない手書きで。 ・整理整頓のルールをシンプルに。 ・ルールを明確にして、みんなで守られるようにする。 ・悩んでいそうなのはみんなて声をかけ、担任外でも! → 担任がよってほこりやうたててあげる。 ・めあてを掲げる時は全員がわかるように書く。 ・「ありがとう」「ごめん」が言えるクラスに。 ・子どもが成長や勉強は進める。励める。 ・文庫の字も大切に。 ・危険なものは置かない。

先生方の「4つの視点」工夫まとめ

4 学校行事での取組

している。学校全体が「安全・安心な場」となってきた感じがある。見られる。

学校行事においても、今までの教師主導の形から児童主体のものへと変えていった。本校には「学習発表会」という行事がある。各学年で合奏をしたり、群読をしたりするものだ。6年生では、例年は教師主導で「劇」を行っていた。劇をする場合でも、脚本選びや演出、演技、練習方法などを自分たちで考えさせることは可能だ。しかし本校では、例年通りという定義をなくし、何をするかの内容そのものから児童たちに考えさせることにした。児童たちは戸惑いながらもアイデアを出し合い、何度も話し合った。最終的に、令和5年度は「書道パフォーマンス」、令和6年度は「赤崎小の思い出劇」をすることになった。児童主体で考えたことで、与えられる学習発表会から自ら創り出す学習発表会となり、練習段階から生き生きと活動する様子が見られた。教師は



全て自分たちで創り上げた「書道パフォーマンス」

準備や困ったときのアドバイスをする役に徹することで児童の成長を促すことができた。自分たちでやり切ったという達成感から、卒業文集でも多くの児童がこの時の感動を記していた。他の行事(運動会や遠足)や生活場面(席替えや家庭学習の内容)などでも同様に組み込んだ。「させる」生徒指導ではなく「支える」生徒指導は、こういった行事や特別活動の場面でも生かすことができる実感した。



赤崎小校舎

5 おわりに

生徒指導の在り方を見直すことで、児童だけではなく教師も共に前向きに過ごすことができていくように感じる。とは言え、まだまだ本校に内在している課題は多い。これからも児童の実態に合わせたよりよい生徒指導の手立てを考え、児童の成長を支えていきたい。

の夫 私工

「地域とともに」 地域探究活動の実践」

県立笠岡商業高等学校

教頭 東 義信



1 はじめに

本校には以前から、課題研究の講座「笠SHOP」があり、現在まで、地域と連携した授業を展開している。これまでに、商品開発班が地元企業と連携して数々の商品開発を実施してきた。平成28年度には、この笠SHOPに観光班が開設され、私とその担当になった。これが「地域とともに」を合言葉に、私が地域での学習活動を進めるきっかけである。

2 観光班の取組

観光については、現行の学習指導要領に商業科目「観光ビジネス」があるが、本校ではそれを先取りする形で実施した。教科書が存在



観光ツアーで案内をしている生徒の様子

しないため、授業の中で何ができるのか、どのように展開していくのかを生徒とともに考え、毎回の授業で、地域の方（卒業生、地元観光企業、観光協会など）に参加いただき、助言を受けながら進めた。その結果、コロナ禍を除き、

3 授業での工夫

毎年ツアーを実施しており、今年度で10年目を迎える。ツアーも認知され、リピーターの参加者も見られるようになった。

この授業においては、とにかく「足を運ぶこと」を重視した。

これにより、生徒は地域の課題を自分事として捉えることができた。自ら取り組むことにより、質問を受けた際にも自分の言葉で答えることができるようになった。また、生徒の主体性を尊重するため、教員はマネージャーとしての立場に徹し、生徒主体で授業が進行できるよう見守った。平成28年度の成果として、生徒は2月に笠岡諸島3コースのツアーを実施した。生徒の成長はめざましいものであった。私はその姿を身近で実感し、この生徒の頑張りを全国に知ってもらいたいと考え、平成29年度に全国商業教育研究大会で発表するに至った。さらに、生徒に実践の場を多く経験させるよう配慮した。電話連絡一つにして、最初から容易にできるもので

はないため、特定の生徒に任せるのではなく、毎回異なる生徒に担当させた。生徒は地域の大人と交流することで大きく成長していった。ある生徒は「大人の前で発表すると、頷きながら聴いてくれるので発表しやすかった」と語った。このような経験は、日常の学校授業では得られないものであると考



北木島でのフィールドワーク

4 コンテストへの挑戦

これらのことから、地域での発表機会を増やしたいと考えるよう

になった。また、生徒の努力を外部に評価してもらうこと、笠岡・笠岡諸島（日本遺産）を全国に広く知ってもらうことを目的として、コンテストへの挑戦を生徒に促した。当初は敬遠されるかと思ったが、実際には積極的に手が挙がった。ある年のコンテストで優勝した際に、一人の生徒が「私、こんなに嬉しいのは初めて」と言った。その何気ない一言が、生徒が輝いた瞬間であったと感じた。私は、生徒には輝ける機会が多く存在すると考え、現在も積極的に応募を勧めている。

5 探究班の取組

商品開発班や観光班での発表活動に加え、ビジネスプランを発表する班として有志チームの探究班を結成した。今年度で6年目となるが、これまでに数々の賞を受賞してきた。代表的なものとして岡山イノベーションコンテストがあり、本校はこれまでに二度、部門賞を獲得している。今年度で同コンテストは第9回目を迎える。探究班の活動は、現在学年ごとに体

系化することができた。一年生は、学習の一環として先輩のコンテストを見学し、二年生は、ビジネスプランを構想してコンテストで発



ビジネスプランの実現例：クラフトコーラ



岡山イノベーションコンテストでの受賞

表する。さらに三年生では、そのビジネスプランを実際に実現することを目標としている。

6 伴走することの大切さ

多くの取組を通じて、私は生徒に寄り添い伴走することの大切さを学んだ。今でも、生徒の「うれしい表情」や「発した言葉」を鮮明に覚えており、それを次の生徒たちに伝えていく。伴走すること

からこそ語れるのだと考えている。生徒に実際に行動させ、その成果を発表する機会を与えることによって、生徒は大きく成長していく、これが岡山県の「夢育」（一人ひとりの子どもが、自分の中で「夢」を育みながら、それに挑戦していく経験を通して、「意欲」や「自信」などの「自分を高める力」を養っていく教育のこと…岡山県ホームページ）に直結する取組であると考えている。

7 おわりに

試や就職の面接等に生かし、難関大学に合格を果たした生徒も現れた。本校（商業）の探究の強みは、机上の空論ではなく実践に裏打ちされている点である。生徒は自ら足を運び、体験を通して得た情報を、自分の言葉で語ることができ

10年、地域と連携した探究活動を続けてきた。多くの困難に直面しながらも探究の意義や生徒たちの著しい成長を目の当たりにし、とてもやりがいを感じている。この活動は、地域の皆様や本校の先生方の御理解と御協力がなければ成りたないと思っている。心より感謝している。今後も笠岡商業高校は、地域とともに教育活動を展開し、地域にとって、なくてはならない学校として、今後も存在し続けたい。